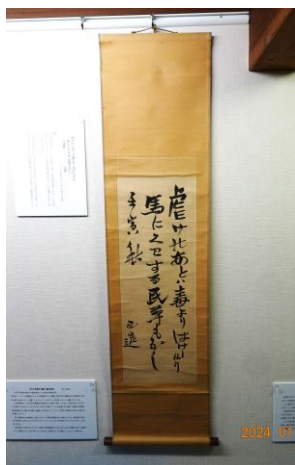


新規展示物（R6年1月～展示中）

令和5年12月末に新規に展示した物です。

この展示物は、令和6年1月～令和6年12月まで展示していますので、是非ご来館して見ていただきたいと思います。



田中正造の掛軸『虐げのあとハ毒より はげしけり 馬にくわする 民草もなし 壬寅秋 正造』

（大意）足尾鉞毒で農民の生活は困窮し、政府に解決策を要望したが、十分な対策は講じられなかった。今や鉞毒で農産物も枯れ、人の食糧にも欠き、馬に食べさせる草もない。

この書軸の書かれたのは明治三十五年である。その翌年田中正造は、公害問題で親交のあった河井重蔵の選挙のために来掛し、応援演説を行っている。

（河井家と親戚関係のある神谷知彌氏より寄贈）



伊万里焼の蓋付飯茶碗

この伊万里焼の蓋付き飯茶碗の入手由来が興味深い。茶碗の入っていた箱書きには、河井重蔵の手で「慶応年間、掛川藩家老太田綾部氏、転国ノ際、売却セルモノヲ購入シタルモノナリ、而シテ、氏上総へ行ケリ」と書かれている。

大政奉還後、十五代徳川慶喜は新政府から、駿河・遠江・三河の一部を含めた70万石の所領を与えられた。それがため、今まで所領していた沼津藩、田中藩、小嶋藩、相良藩、横須賀藩、掛川藩、浜松藩の諸藩は、命を受けて、こぞって上総（千葉県）の各地へ転封を余儀なくされた。

掛川藩家老太田綾部も、城主に従って上総松尾藩の地へ移転するため、最低限の物以外の家財は、処分しなければならなかった。こうした中、河井家が手にいれたのが、この品物である。

飯茶碗の九個のほとんどが、金継ぎ（破損補修）されたものである。地震が何かで破損したにも関わらず、よほど気に入ったものか、金継ぎまでして大事にしていたことが窺える。

（掛川市蔵）



御大礼記念の六角皿

昭和三年十一月十日、皇太子であった裕仁（ひろひと）殿下は、大正天皇崩御により、天皇即位礼を挙行し、第124代の天皇に即位した。

この即位の礼は京都御所で、国民祝意のうち行われた。この即位礼を大礼（たいれい）、大典（たいてん）といい、一般人は御大典（ごたいてん）と称した。

当時河井弥八は、宮内省の侍従次長の職にあり、この即位礼（式）には深いかわりを持ち、大礼準備委員を前年の六月二十日に仰せつけられた。他の多くの関係者と共に準備万端整え、つつがなく即位礼（式）を執り行うことができた。

これを記念して、関係者連名でこの大礼六角皿を作製した。河井弥八を中心に据え、順不動の寄せ書きにしたものである。宮内大臣の一木喜徳郎氏（大日本報徳社社長の経験者）の名も見える。

（河井正志氏寄贈）



松崎慊堂銘の盃

この盃は山崎徳次郎から明治二十年ころ、河井重蔵に贈られたことが、収納箱の箱書に記されている。徳次郎は、十王町松ヶ岡の当主、山崎千三郎（事業家・政治家）の兄である。

盃には、掛川藩主太田資俊すけとしに招かれて掛川藩校の教授となった松崎慊堂きんどうの「肩思也再斯可すけ」の銘がある。（酒は飲み過ぎないように、二杯程度がちょうどよい）の意か。

※出典 「再斯可すけ」論語公治長第五ー20
(掛川市蔵)



(全体) 右側4個が今回追加展示品

ボンボニエール (追加分)

令和5年12月に、河井弥八氏の三男 興三氏のご子息 河井正志氏より河井家の所蔵品を多数記念館に寄贈してくれました。その中で、寄贈されたボンボニエール6点の内、名称のわかった4点を紹介します。

前回より展示	A	B
	C	D



(A) 『香炉形ボンボニエール』

家紋 天皇家 銀製
いつ戴いたものか不明。



(B) 『雅楽太鼓形ボンボニエール』

昭和3年11月17日、2日間に亘って行われた昭和天皇即位時の大礼の宴の引き出物。
家紋 天皇家 銀製



(C) 『でんでん太鼓形ボンボニエール』

昭和10年12月5日、常陸宮殿下の御誕生祝いの宴の引き出物。
家紋 天皇家 銀製



(D) 『洋書形ボンボニエール』

久邇宮邦英王の御成年式のお祝い品。
昭和5年5月26日 銀製